

来年は、こうなる!

ニューテクノロジー

New technology

2009

経済状況が悪化しても、技術の進歩は歩みをとめることはない。
テクノロジーウォッチャーの鈴木淳也氏、塩田紳二氏、的場晃久氏の3氏が、
2009年の動向を予測する。

イラスト ● Takayuki Iwase





元気なIT、静かなネットワーク?

2009年のITはこうなる!

米国発の金融危機で騒がしい昨今ではあるが、ここIT業界においては今後数年で大きくトレンドが転換するポイントがいくつか見受けられる。コンピュータと通信技術の話題を中心に、そのいくつかをピックアップしてみよう。

文●鈴木淳也 編集●飯岡真志

Nehalem 登場で大きく 変化したPCアーキテクチャ

2008～2009年にかけてもっとも大きくトレンドが変化しつつあるのが、PCアーキテクチャだ。インテルは2008年11月、「Core i7(開発コード名: Nehalem)」プロセッサを市場に投入している(写真1)。Core i7の最大の特徴はメモリとプロセッサ同士の接続方式にある。従来までチップセットに内蔵されていたメモリコントローラをプロセッサ内部に包含し、プロセッサ同士はQPI(QuickPath Interconnect)と呼ばれる方式でピアツーピア接続する。

プロセッサやチップセットの機能の分け方が大きく変わるため、結果としてマザーボードを含む大部分のコンポーネントが入れ替わることとなり、2009年以降はローエンドを含むPCアーキテクチャ全般が影響を受けることだろう。

インテルはボトルネックの解消で、HPCやスーパーコンピュータなどのハイエンド市場で存在感を見せるAMDのOpteron追撃をNehalemでのミッションとしている。そのため、2009年いっぱいはおもにサーバやハイエンド

デスクトップがNehalemの主戦場となり、ノートPCやミッドレンジ以下のデスクトップPCでは引き続き現行のCore 2 Duo/Quadが主力になるだろう。

2009年以降に激化する RIAプラットフォーム戦争

システムのアーキテクチャとともに、ソフトウェアの開発スタイルも変化しつつある。さながら2007～2008年は「スクリプト言語」の年だったといえるだろう。スクリプト言語とは、特定の処理の記述のために用意された簡易的な言語のことで、多くはインタプリタ方式を採用している。

Webアプリケーションやバッチ処理を中心にシェルスクリプトやPerl、JavaScriptの利用が以前より進んでいたが、最近ではデータベース処理に向けたPHP、Googleでも採用されているPython、Ruby on Railsで注目を集めたRubyなど、スクリプト言語が百花繚乱といった状態だ。

こうしたスクリプト言語の次の波がRIA(Rich Internet Application)とそれを支えるフレームワークだ。RIAは表現力に限界のあるHTMLとスクリ

プトベースのアプリケーションに代わり、よりビジュアルとインタラクション(反応)の両面でユーザー訴求力の高いアプリケーションの構築を目指している。

●Flash/Flex

もっとも典型的な例がアドビ システムズのFlash/Flexで、WebブラウザにFlashのプラグインを載せることで、通常のブラウザのみでは表現しにくいダイナミックな画面描画や通信、アニメーション処理などが実現できる。近年ではYouTubeなどのFlashを利用した動画配信がブームになったことを受け、インターネット上を流れる動画の約9割がFlashベースのものになっていると同社では説明する。

Flashの特徴はアニメーションや



写真1 米国でCore i7の発表を行なった米インテルデジタルエンタープライズグループSVPのパトリック・ゲルシンガー氏。同氏が手に持つのがCore i7